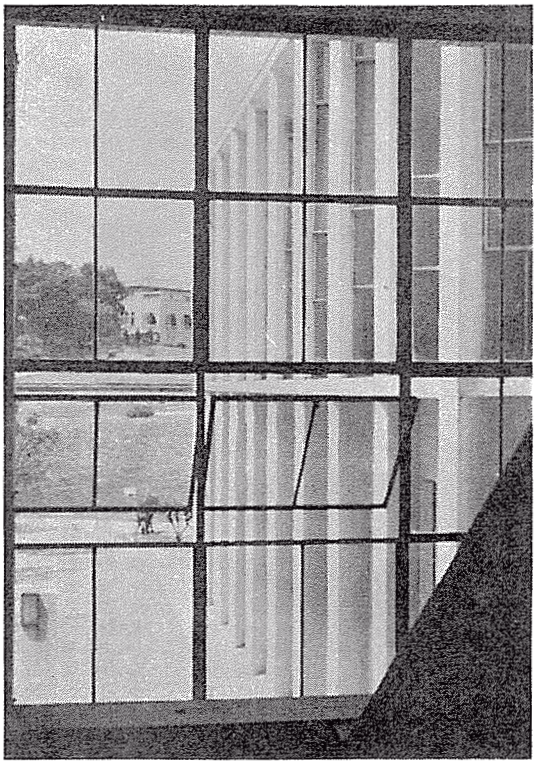
THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

Osaka, Jan. 30th, 1957. No. 299

關西大學學報

昭和三十二年一月　第二九九号

昭昭二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和三十二年一月三十日発行（毎月一回三十日発行）
通巻第二九九号



第二学舎より以文館を望む

關西大學學報局

海外研究員だより

大学の金文字

―フライブルクにて―

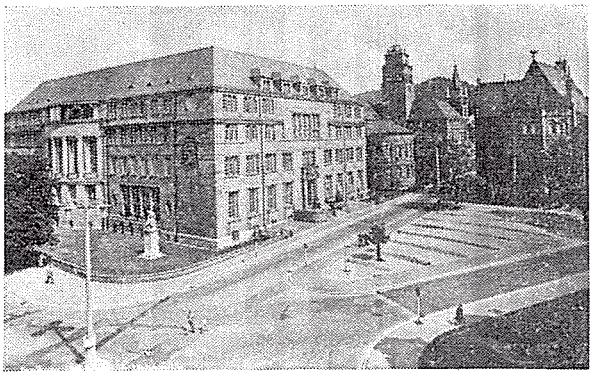
藤本是

"DIE WAHRHEIT WIRD EUCH FREI MACHEN"

――真理は汝らに自由を得させべし――

アルベルト・ルードウイッヒス・ウニフェアシテート・フライブルク・イム・ブライスゴー通称フライブルク大学の新装なつたアウラの外側に金文字で録されたこの言葉を初めて読んでから早や一ケ月以上になる。最初は大学の単なる Stichwort（標語）と見て、いづれかの出典があるのだろう位にしか思わなかつたものが、時と共に私の脳裡にこびりついて了つた。シュタート・テアターの隣にあるギムナジウムの玄関から見ると、黄葉した街路樹を透して燦然と光つているところは一見如何にももつともらしい。従つて在り来りの装飾に過ぎない様だが、この建物の内部で行われる講議を聞き、ドイツ人の精神にいくらかでも触れて来ると、その金文字が単なる虚飾でないことが分つた。この言葉は意味深長である、こゝフライブルク計りではなく恐らくは全西独を通じて。ところでかく云う場合、この言葉の解釈は「ウァールハイト」よりも先づ「フライ」従つて「フライハイト」から始まらねばならない。

"FREIHEIT" 実際、今日の独乙人は彼等の理解する自由のためにはいつでも銃を執り、血を流すであろうと思われる。時恰もハンガリーの叛乱に会い、全独乙は心から同情を送つた。ラヂオはアデナウアーの演説を伝えフライブルクの学生や市民もハンガリーのために祈祷の時間をもつた。各新聞は勿論、各種のイルストリールテも "Todesmutige Patrioten erkämpften die Freiheit für Ungarn" と讃え、"Wie Budapests Freiheitskämpfer starben" とその惨状を伝えている。東独の神経が非常に昂ぶつたことは推測して余りあるものがある。それにしても西独は先づ先づ落着いていると云つて良かろう。そしてその「落着」は吾国では見られない一種独特の性格を有つている様だ。それは独乙人が尚、ヨーロッパ二千年の歴史を顧慮しつゝものを「考える」ことが可能であると云うことだ。日々のラヂオ番組には実に屢々哲学や宗教の講演が組入れられる、その中でプロフェッサー・ハイデッガーの名を聞くことも多い。フォルクス・ホッホ・シューレ（吾国の市民大学の様なもの）のビラが至る所で見られる。哲学の講義は、勿論満員である。そのためコックス・ミューラー、オイゲン・フィンク、カール・ウルマーと云つた諸教授の講議はアウラで行われる。



フライブルグ大学

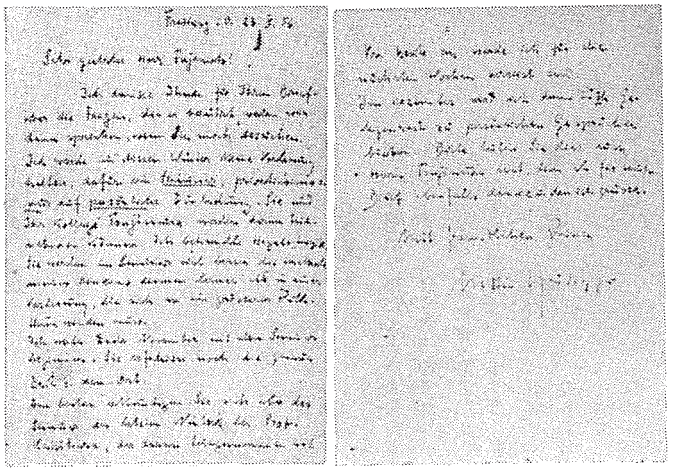
ミユンヘン郊外のグラーフィングで私を好遇してくれたローナー夫妻の言によれば、戦後の独乙人は一般にものを考えなくなつたそうである。私もこの、夫妻の言葉を信じない訳ではない。而も、むしろ独乙人一般がそれを自覚していると云う所に問題があるのだと思う。例えばウルマーの哲学入門はこちらの学生にもむつかしい、吾々独乙人にむつかしいものが外国人に分るかと尋ねる者もいる。それでも彼等は根気よく聴きに来るのだ。同じウルマーのゼミナールは、これまた、格別に厳しいものである。最初は最高学年でまだカントの第一批判をやつているのかと思つたが、内容を聞いてみると成程とうなづかれる。第一批判の die Analytik der Grundsätze の所を問題にしているのだが、全体の綜合的観点から実に詳細に論じている。二時間の内容は学生によつてプロトコールが取られる。次の時間は先づそのプロトコールの検討である。そしてその検討が実に厳格で峻烈を極めている。見ていて

学生が気の毒になる位だ。初めは滔々として読み、自信の程も見せていたものが途中で完全にのびて了う。それでも彼は悪びれない、次の時間は元気で顔を見せているのだ。私は故国での自分の授業を顧みて恥かしくなると共に羨ましいとも思つた。

独乙人は自ら言う。"Wir arbeiten zu viel" と。独乙人は実に良く仂く、これは婦人についても言えることだ。zu viel とは一般にネガティフな表現であるが、それがいかにもぴつたりする程に良く仂く。身体が悪いと云つては、一人でクランケン・ハウスに出かけて行く。四日程して、帰つて来ると、あくる日はもう庭園の掃除をしているのだ。それでも日曜日は完全に休息する。教会からの帰途、清流に沿つてたち並んでいるポプラの樹陰で、ベンチに腰かけながら、遥かに拡がつている緑の田園（ミュンヒエン郊外）を眺めている風景は、最も良く彼等の「落着」を示している。レストランやガスト・ハウスも亦彼等の落着の場所である。こゝでは吾々日本人にとつては凡てがむしろ zu langsam である。

この落着をどう説明すればよいのか私には分らない併し強いて言えば、精神的にはカトリークとエヴァンゲールの伝統が未だ生き残つているのと、経済的にも急速の復興を遂げているからであろう。独乙経済の復興については、カール・ゲーニッヒが "Das heutige Westdeutschland" の中でこう言つている。独乙経済の奇蹟と云う警語 "Das Schlagwort von deutschen Wirtschafswunder" は独乙ではなくて、何処か他処で見出されるだろう。

それは天からの贈物として落ちて来たのではない、戦争とヒットラー政権が残し去つた瘡物の中から、再び四千八百万の人間のために、彼等の生存の土台を作り出すためには、絶望的な努力と比較を絶した忍耐とが必要であつた、と。そしてこの努力と忍耐とによつて一九四九年から五一年迄に約一〇〇万（"Die Wirtschaft der Bundesrepublik" の統計に依る）の住宅が作られ、東独其他から流れ込んだ九〇〇万以上の逃亡者にも拘らず、今日のアルバイトローゼは僅かに一五〇万（一九三六年よりも僅か三〇万だけ多い）に減少し、生産状態は遂に戦前を六〇％上廻るに至つたのである。併し其際、ゲーニウヒは西独の税金（ストイアー）は全世界に於て最高であり、スエーデンのそれ以上でさへあることを看過してはならない、とはつきり断つている。これが今日尚、独乙人が孜々として仂かねばならない所以である。而もそれから一、一〇〇億クローネを独乙経済に投資し得たし、尚更に貯蓄が始つた。一九四八年以来預金は約六〇億クローネを下らない額を増加した。D・Mがアメリカ・ドルやスイス・フランクに殆んど劣ることなく堅い所以である。



ハイデツガーの私信（藤本氏宛）

高税については独乙人も不平を洩らさぬではない、私も一度ならず聞いたことがある。それが又同時にアデナウアー政権に対する不平でもあつたが、彼等の政治に対する関心の稀薄なのにはまた驚かざるを得ない。現に私の下宿の主人の如きはハイデル出のインテリであるにも拘らず、此処の市参事会員の選挙がいつ行われたのか知らないでいる。そして正に之と正反対の興味ある対照を示すものは宗教だ。宗教に関しては、勿論形式上の問題に過ぎないが、恐ろしく熱心である。

カトリークの祭日は実に多いが、それに又二十才代の所謂ユンゲが几帳面に参加して教会に出入するのも興味深い。戦後のハルプ・シュタルケン（アブレゲール）の問題は独乙に於ても困難 "die Schwierigkeiten" の一つであつたが、これも、或教授の夫人が私に語つた如く、宗教、特にカトリツクによつて多少緩和されたそうである。併しこゝには少なからぬ問題があると思う。この私の疑問を暫く置くならば、彼等が吾々と語る話題の多くは宗教である。そしてたとえそれが、如何に形式的であつても、彼等の所謂シュレツクリツヒな現実に、引きずりまわされることなく、積極的には落着を以て、消極的には逃避しつゝ生活し得る所以のものがこのあたりにある様に思われる。厳密に云うならば、それは宗教と云うよりも、伝統の力である。

私の滞在して来た所は概ね、特に保守的な色彩の濃い地方であつた。ミュンヒエンでは九月にフロンライヒナムの祭礼でテアチナー・シュトラーセからルード

ウイッヒ・シュトラーセ一帯にかけて街全体が一個の教会に化するのを見て驚いたことがある。実に荘厳なものだ。此地方ではカトリークの勢力は絶対的だと云つてもよい。大学には例のローマーノ・グアルディニがいて、カトリック青年運動の指導的な立場にある。此処フライブルクに於ても有名なミュンスターの所在地だけに全体が矢張り宗教的なものを蔵している。マクス・ミューラーの人気も相当なものらしい。

併しこのコンサーバチスムスは勿論ファナーティカーのそれではない。純粋に宗教的な信仰と云う点から考えるとむしろ追力の弱いものではなかろうか。独乙人が今ファナチスムスへの危険を有つとすれば、それはまさに「自由」の名に於てであると思われる。

先日、ウルマー教授が講義の中で哲学成立の必然性を説明しつゝ、"Daß die Freiheit eigentlich im Menschen liegt, das bedeutet es zugleich, daß der Mensch wirklich lebt." と云つた時に、全学生が机を叩いた。学生の幾人が彼の言葉を本当に哲学的に理解しつゝ、机を叩いたのか私は知らない。併し机を叩いた学生の凡てがハンガリーに於ける「自由斗争」を思い浮べていたことは確かである。

独乙人の多くは今失われゆくゲマインシャフトを歎いている。Gemeinschaftlosigkeit はたゞに独乙のみの問題ではないが、ヨーロッパにあつて、これに一番哀惜の情を懐いているのは何と云つても独乙人ではなかろうか。だが、あのカトリークの勢力を以てしても而も猶、ゲマインシャフトは失われてゆく。教会勢力の裏にあるものは、矢張り「自由」、であつて、信仰のゲマインシャフトではないのだ。フライブルクの街角に佇む青年の背後に私は屢々孤独の影を見る様に思う。現に或る独乙人は私にこう云つた、自分は Bekannte は有つているが Freund は一人もいないと。彼等も亦、失われゆくゲマインシャフトが単なる感情によつて帰り来らないことを知つている様である。従つて彼等にとつて、今、積極的に擁護すべきものは主体の自由の外にはない。そして宗教的伝統が今のところこの主体を豊かに包み込み、保護している様に思われる。伝統の力の上で「自由」は「落着」を得ていると言つてもよいのではあるまいか。

だが、それだけに対として、この自由は独乙人本来の性格と相俟つて荒々しい力をもつ。私は彼等の鼻息

（七頁に続く）

私の渡米に際して、学校当局、教授、事務の諸先生、又、学生諸君の示された御好意のそれぞれに対し、感謝の手紙を出すべきですが、貴い紙面を借りて一度に義理をすませます。

飛行機は十二月四日夕七時に羽田を出て、闇黒の日本をあとに北進、アリューシャン列島中の一つに着き、茶菓等のサーヴィスを受け、夜中二時半こゝを出て、アラスカの雪景色の夜あけを見つゝ南下、経度の相違の為、正午前後から日が暮れ、又々夜半にシャトルに着く。大雪の為、乗りかえた飛行機が五、六時間も飛ばず、始めての米大陸の飛行場の売店で、サンドウイッチを食べたりしながら、夜明けを待ち、大陸横断、夕方（米国での十二月五日）ニュー・ヨークにつき、すぐボストン迄、一等に乗りかえてとびました。室中すべて黄金でかざり見事なものです。さてボストンでは、やつとヴェンドーム・ホテルに室がとれ、久しぶりで寝ました。

翌朝タクシーでハーバード大学へ行きました。人のいゝ運転士がしきりに日本のキャメラをほめ、世界一だと云つて呉れました。しかし大学に入つてからも中々ヤコブソン教授の研究室が見つからず、親切な学生や、教官の御骨折でやつとヤコブソン教授に会え、一見旧知の如く、いろいろ研究の手筈の打合せをしました。先生の下でカムチャダール語を研究しているウォース君の世話で下宿も見つかりました。京大文学部の英文学助教授菅君と同じ宿、いろいろ世話になつています。一寸京都に似た上品で静かな町、米国よりも、何かが英国風です。古いたてものもそのまゝ残されています。時間は教会のベルで正確に報ぜられ、時計もいりません。大図書館と燕京＝ハーバード図書館の間を往復、ギリャク語を主として珍しい本を読んでいます。食事も大体要領よく食べられる様になり、夜は誠に静寂、良い所へ来たと喜んで居ます。三ケ月位滞在予定。

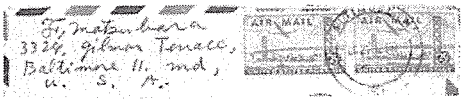
18 Sumner Rd. Cambridge
Mass. U.S.A. にて
十二月十三日夜

（教授、文学部）

海外研究員だより

アメリカ短信

高橋盛孝



雪のナイヤガラ

海外研究員だより

松原藤由

一、ジョンス・ホプキンス大学

この大学は日本ではハーバードやコロンビヤ大学のように有名ではありませんが、しかし当地では大学院中心の私立大学として、かなり有名に属するらしいです。私がこの大学を訪れたのは、正直に申しますとアメリカ通過のビザを採る手段として、何処の大学がよろしいかと、森川太郎先生に聞いたら、ジョンス・ホプキンスのマクラブ教授（一九五五年、関西大学へ来学）を訪れてはどうかと云うことで、別段深い思慮もなく、とにかくこの大学に来たわけです。ところがビジティング・スコーラーとして研究室まで用意しての、なかなかの「招かれる客」となりました。そこでやむなくマクラブ、クズネツ、ドマール教授等の講義とゼミナールに出席して、いささか敬意を払った次第です。しかし十数年前の学生にもどつたわけですから、かなりの強行軍で、身心共に疲労するのをおぼえました。だが夜は適当にバアに行つてビールを補給して英気を回復し、時には教室で「いねむり」を半時間もして、とにかく私が予定した十二月十九日の最後（前期）の授業日まで出席をしたことだけは事実です。国民所得や経済成長論が一九五六年のこの大学大学院の主たる研究課題のようでした。もとよりわかつたようで、その実はわかつていません。これは日本へ帰つてから、とくと考えてみようと思います。だから「見」は易く「聞」は難しです。

ホプキンス大学の授業料は何と年額にして八百ドル、ざつと二十八万八千円です。それに寄宿舎代が前期四百二十五ドル（九月より一月）、後期三百ドル（二月より六月）と入用です。貧乏人の子供が入学出来る大学ではありません。ところが来年（一九五七年）から授業料は一千ドルに騰貴するそうです。授業料のあがるのはあに日本の私立大学だけではありません。

当大学へは日本の教授先生が沢山御訪問になるようです。現に私以外に、名古屋大学の北川教授、一ツ橋大学の荒講師が御滞在ですし、都留教授も、私が到着する二月前に、ゼミナールで御講義をなさつています。工学部にも数人の若い人達が研究しています。その他ドイツ、イギリスからも助教授級の学者が数人来学されて経済学部の研究室におられます。それだから小規模ながら国際大学のようです。丘の上にある赤煉瓦の古風な、しかも落ついた静かな大学です。この大学で語学のウォーミング・アップを少々はしましたから一月初旬、いよいよロンドンへ向います。イギリスが主たる私の目的地です。その次はドイツのキールです。

そこで思いついたのですが、アメリカ人は生活に余裕が出来るとヨーロッパへ、特にイギリスを中心としてフランス、スイス、イタリヤ等へ旅行するようです。二度も行つて、なおもう一度行きたいと云う七十近い老人の話も聞きました。その理由は何でしょうか。解答は極めて簡単のように思います。歴史の浅いこの国は徹底した機械化と、繁栄する現代資本主義以外何もありません。あれば巨費を投じて世界から集めたものばかりです。だからこの国の人々は文化的祖国イギリスを常に尊敬し、遊金があればイギリスへイギリスへと草木もなびくのです。アメリカの祖国は今日なおも、シェークスピアやスミスを生んだイギリスである、このことをわれわれは、特に政治家諸君は忘れてはならないと思います。

二、太陽に恵まれぬニューヨーク

サンフランシスコに着いた在米第一日の夜、チャイナ・タウンを見物していたら、美しい婦人に道を尋ねられて、「ドキン」としました。なるほどアメリカには白も黒も私の如き優秀なる黄も、とにかく諸種雑多の人種が一つの言葉を紐帯として生活しているので、他人種に道を尋ねること位は、何の不思議もないのでしよう。これが日本の女性が、たとえ英語がエキスパートであるとしても、アメリカの男性に道を尋ねるような馬鹿者は、広い東京や大阪といえどもありますまい。日本ではパン助嬢が招く位いがせきのやまでしよう。アメリカにはコール・ガールと云うのがあるそうですが、パン助嬢なんておりません。不幸にも私は道を二、三度尋ねられた位いで、御招きをうけたことがありません。もつともいろいろの人種が住んでいるだ

けに社会道徳と秩序は、よく守られているようです。この点は一等国民です。

さてニューヨークは御承知のように摩天楼が空を圧して林立しています。一〇二階のエムパイヤー・ステート・ビルにも一ドル三十セント払つて登りました。世界金融・株式市場の中心であるウォール街も歩いてみました。ロックフェラー・センターも、カーネギー・ホールも訪れました。実に壮観と云うか、全く豪壮です。ニューヨークは科学の進歩と人間の叡智をマンハッタンに集結して、これで空を圧して世界第一であると云つているようです。実のところ私は近代建築学の粋と天文学的巨額の経費には敬意を表しました。だが太陽の地上にあたらぬこと、恐らく世界第一でしよう。この街ではテレビもはつきりしません。よいテレビを作りながらぼんやりしたテレビを眺めて人々は結構楽しんでいます。朝から輝くネオンを一挙に消したら、この怪物都市は忽然として昼なお暗き深山の谷間と化すでしよう。

ニューヨークからバッファロに行く急行列車の中で、ニューヨーク市に住む或る猫好きの建築家と知り合い、猫が好きかと問われました。猫は猫でも猫が違うが、御愛想に猫は好きだ、とうそを云いました御蔭で、猫を連れたこの紳士と数時間珍妙なる会話の練習をしました。奥さんと名のつく猫以外に本物の黒猫を連れていました。その時、日本の物価はどうかと問うから、アメリカよりは安いと云つたら、その通りだ、アメリカ、特にニューヨークは高い、建築費も非常に高くかかるので自分の仕事もなかなかやりにくいと、建築家でない日本人の私に、盛んにこぼしていました。もつとも日本の所得とは問題にならないほど高い所得ですが、しかし家賃の高いのも実に驚くべき状態です。「エンゲルの法則」など、このニューヨークでは一体どうなるのでしようか。それにニューヨークでは、アメリカの都会は何処でもらしいですが、自動車の置場に困つているようです。有料置場のネオンが到るところ輝いています。文明の足の代理機も、ここまでくれば自転車の足に劣るのではないでしようか。アメリカで自転車をもつている人は富める人でしよう。想うに精神的文化には際限がない、しかし物質的文明には、やがて限度がくるのではないでしようか。こんな馬鹿げたことをつくずく考えました。マンハッタンの高層巨大怪物都市ニューヨーク、それは今日なおも繁栄を続けるアメリカ資本主義のシンボル以外の何物でもない、と思いました。

三、雪のナイヤガラ・フォールス

アメリカの美人が、どれなのか二ケ月たつても私には未だにわかりません。主観的価値判断で、これが美人に違いなかろうと一人で決めて素通りしているだけです。およそマックス・ウェーバーの言うような「客観的価値判断」などは「美人判断」などに到つては必要がありません。ゾンバルトが、かの有名な価値判断論争で「黒髪が美人なりや、黄金髪が美人なりや、わからぬではないか」と云つたようですが、あたり前です。人間の行為や判断には、どうしても主観的要素がつきまといます。自然科学と社会科学は本質的に違うのです。前者は人間のための科学であり、後者は人間の科学でありますから、だから後者の科学における価値判断は出来るだけ歴史的社会的現実と歴史合理性に照らして客観化することが必要なだけで、生きた人間であることまで忘れた価値判断の如きは、学者の寝言であり、それは非実践的価値判断でしかありません。ボルチモアでぼんやりしている時、こんなとんでもないことを考えていますと賢人のかかるノイローゼにとりつかれるといけませんのでサンクス・ギビングの休みを利用してニューヨーク・セントラルの急行列車でバッファロ、と急ぎました。

十一月二十四日（土）晴、午前九時グランド・セントラル駅発、午後五時十五分着。一面の雪でサツサツと降つていました。確かに三寸は積つていました。日常会話だけは少し馴れてきましたので費用の節約から始めてY・M・C・A・のホテルに宿泊しようと思いつき、駅の電話帳で所在を調べてみました。ところが大失敗で、とんだ番地をタクシーの運転手に告げたため、行けども行けども果なしでホテルへは着きません。いまさらながらアメリカは日本の二十二倍の広さだつたと気がつきました。タクシー代七ドル。Y・M・C・A・のホテルは約一ドルで行けるダウン・タウンの繁華街の近くにありました。しかしこの御蔭で雪の降りしきる夜のバッファロを心ゆくまで見物しました。空腹でしたが、何が幸いかわかりません。何事も汝の思う通り一度はやるべしです。勿論二度とやるものではありません。カナダに近い片田舎の都会の雪の夜は、また格別の情緒を織りなしていました。白一色の銀世界。

ボルチモアは大変暖かでしたので合オーバーで出かけたわけですが、とても寒いので街のバアでウイスキーを二杯とビールを三本飲んで空腹に気合を入れましたが追付きません。いくら飲んでも慾しくなるだけでした。よい心持で、それから私は、Y・M・C・Aの四階の窓から更行く雪のバッファロの街を、いつまでもいつまでも、生きとし生ける者が死んだように静かにして眺めていました。美しい夜でした。

明けて二十五日（日）晴、小雪、午前八時の汽車でナイヤガラ・フォールスへ向いました。今日も寒い日でした。雪がチラチラしていました。見物人は数人で、それも早々に引上げて行きました。たつた一人で一時間半ほどカラー・フィルムを沢山写しましたが、手が凍るようでした。水量実に豊富な壮大な滝です。水煙におほわれたゴード島は枯木に花が咲いているようでした。左の本流がカナダ滝、右がアメリカ滝。雪のナイヤガラを見ようとは夢にも思つていませんでした。大地の果にわれ一人たたずむの感じで、ゴウゴウと鳴る瀑布の音しか何も聞えませんでした。

アメリカ人は概して親切です。バッファロのタクシーの運転手も、下宿のおかみさんも、大学の人々も、その上、明朗で単純です。こんな国民を相手に戦争したとは、軍人の無能は別としても、政治家の無能と無気力には、いまさらながら驚かざるを得ません。日本の景気もよいらしいですが、アメリカの資本主義は、まだまだ繁栄するでしよう。国内に後進地域をもつているからです。それは西部と南部でしよう。南部へは、かなりの諸工業が、北部の支工場として建設されているようです。南部で思いつきましたが、黒人の多いことは私の想像以上でした。あらゆる下層の、しかし重要な仕事に女も男も従事しています。白と黒の人口増加比較は知りませんが、このままではアメリカは黒人帝国になるのではないでしようか。ワシントンの造幣局の印刷局などでも黒人が沢山仕事に従事していました。

八時十五分の夜行でバッファロを発ち、ボルチモアへ帰るのを、特に急ぎました。車掌が親切にしてくれましたのでチップを少々やりましたら、「如何なる御配慮も乗務員には御無用に願います」とちやんと書いてありました。二十六日（月）には関西大学で昔、御教導をうけた磯部喜一先生が、私に会う目的だけでボルチモアに御出でになる日でしたので、心してか、夜中、一、二度時計をみました。車窓は粉雪しきり、ボルチモアへは朝の七時四十五分、間違いなく帰着しました。この日の午前十一時に、ペンシルヴァニア・ステーションで磯部先生と御会い出来たのは勿論のことです。

いろいろのことを雑然と書き綴り短信変じて長信になりましたが、とにかく元気にて、その日、その日を送つておりますので御休心下さい。今日までに見物した都市は、サンフランシスコ、シカゴ、デトロイド、ビッグバーク、ワシントン、ボルチモア、ニューヨークですが、ロンドンへ出発する前にボストンへ参ります。当、ボルチモアは十二月二十八日に引払うことにしました。先ずは近況御報告まで、皆さん御健勝のほど。

一九五六年十二月二十五日、クリスマスの朝、ボルチモア、ギルマン・テラスの一室にて

（教授、経済学部）

（四頁より続く）

に屢々たじろぐことがある。併し自由が落着の根を失う時は最早自由ではなくなるだろう。ヨーロッパ二千年の歴史はおろか、ひとは十年先のことも「考え」なくなるのだ。併し誰が今日この自由の根を確保していると云うのか。ニヒリズムの問題がまさに此処にあるのだと思う。西独の現在の落着は謂わば儲けものゝ感が深い、伝統の力が仮装的な根拠になつているからである。もつと正確に云えば、これは伝統に依つて伝統を利用乃至は活用する政治の力によるのであろう。

伝統が真に生きた根に立つているとすれば、その自由は本物だ。だがもう一度“Seinsfrage”が問われねばならない。人々に真の自由を与えるものは仮象であつてはならない。仮象に基く自由はむしろ破滅への原動力であるからである。

何れにしても今のところ、西独は落着いている。若き世代にも、尚真剣に、ギリシヤ、ラテンの古典に耽り、哲学を読み、宗教を考える余裕がある。そして更に深く考えるものにとつては、ニヒリズムの問題はヨーロッパ二千年の歴史に於ける必然的な課題となり、やがてはエルンスト・ユンガーやハイデッガーの線に続いてゆくのであろう。

ウルマー教授がその講議の中で指摘した様に、哲学することの必然性が人間本来の自由にあるとすれば、自由こそ却つて落着きの根拠ではあるまいか、もしそれが、政治的、経済的な窮迫の際にあるとしても。かゝる自由は常に真理の内面から仂きかけ且つ又真理へと憧れる。真の落着と自由はまさに真理に根ざさねばならない。

こう思つて私はもう一度アルベルト・ルードヴィッヒ大学の金文字を読んだ。“DIE WAHRHEIT WIRD EUCH FREI MACHEN”ハイデッガーをはじめ、この大学で講議する優秀な諸教授と又其許で学ぶ若き研究者達によつて、この言葉が現実に生かされてゆくことを信じると共に、西独の平和を心から祈らざるを得ない。

十一月十五日（教授、文学部）

註：『真理は汝らに自由を得さすべし』は、聖書のヨハネ伝第八章三二節からのことば。

学内報

新年交礼会

一月七日（月）午前十時より、新年交礼会は、多数の大学関係者の出席し、理事長、学長の年頭所感あり、恒例の通り行われた。

學校法人關西大學顧問に宮島綱男氏推薦さる

永年に亘り本学の理事長、専務理事、理事等の要職にあつて、本学の隆盛発展の為尽力された宮島綱男氏を、この程寄附行為第三十四条に基いて、一月二十六日の理事会で顧問に推薦された。

なほ宮島氏は、本学推薦校友で明治四十一年早稲田大学商科を卒業し、英、仏、白に留学、早大教授、関大教授、理事、専務理事、理事長、国際労仂会議使用者代表常任顧問兼国際労仂局理事、神戸日仏協会副会長、同協会神戸仏語学校長、日本経済専門学校理事等を歴任し、現在関大評議員である。

診療所開設

昭和三十一年十二月より関西大学医務課内に第一診療所（千里山・所長藤垣元）、第二診療所（天六・所長向井隆）を開設した。

診療所は健康保険の取扱を実施し、原則として、本学職員及びその家族、学生、生徒を対象し、関西大学が設立し実施する。

人事移動

昭和三十一年十一月十五日付東京連絡本部長を委嘱する

教授　板橋　菊松

昭和三十一年度の学生活動は、色々の点からみて、発展への基礎を充実する年であつた。

学友会では、昭和三十一年度学友会執行部が決定し、その具体的な活動指針に五項目を挙げて大いに活躍した。

文化会、学術会は、例年通り、文化祭学術祭を成功のうちに治め、年々発展の道をたどる各部は、学内における文化会研究会等はいうまでもなく、学外にて多くの講演会、文化会を行い、学術調査団を派遣したことは各部が自信を持つたことと共に昨年の特記すべきことで、我が関西大学文化会、学術会が充実して来たことがうかがわれる。

体育会は、昨年はオリンピックの年であつたためか、体育界の活躍は目覚ましいものがあり、まず古川（サッカー）選手がオリンピックに参加、また、全日本大学野球選手権の王座獲得、さらにアメリカ・オハイオ州大を破つた野球部などが主だつたもので、全日本優勝は野球部のみで、関西学生大会に陸上競技部、レスリング部、相撲部、バスケット部、ホッケー部、軟式テニス部、バドミントン部等が優勝をもたらした。

ラグビー部

東西大学対抗交流ラグビー試合は、関東チームを迎え、暮から新春にかけて行われた。本学は法大、明大、日大と三校と対戦、FWがよく突込み、TBパスを断ち徹底したドリブルで法大、関東の雄明大に健闘し、日大には前半のリードをくつがへして逆転させこれを破り、関西に四勝目をもたらした本学の闘志に賞讃させた。

記録

十二月　法大 36—0 本学　於花園ラグビー場
〃　明大 69—0 本学　於花園ラグビー場
一月　本学 23—19 日大　於花園ラグビー場

スキー部

第三十回全日本学生選手権大会は十一日より小樽市天狗山バーンで行われ、十三日耐久競技（三十七キロ）に阿部賢選手が予想外の好走をみせ、一秒差で一位は逸したが二位に入賞、総合で一部第七位となつた。

全関西スキー大会に輝く十連勝

第二十七回関西学生スキー選手権大会は一月二十日から四日間、神鍋山スキー場にて挙行され、本学は阿部、千葉、平山等各選手が力走をみせ、最終日優勝をかけたリレーに（三十二キロ）二時間七分で優勝し、六十二点を上げ、十連勝（通算十二度目の優勝）を飾つた。

記録　（本学関係のみ）

関西学生スキー選手権大会　於神鍋山

回転　②千葉　1分59秒　④松本
耐久　②阿部　3時間13分2秒　③山口　3時間22分27秒　④内海
長距離　②阿部　1時間26分25秒
純飛躍　②平山　219・1（49・52）　⑤藤谷　⑥丸山
複合　②平山（前半240、後半195・4）　④藤谷　⑥内海
リレー　①関大（内海、山口、平山、阿部）2時7分
総合点　①関大62点　②関学58点　③近大17点　④同大　⑥大学大

サッカー部

第十五回朝日招待サッカー最終日として関大—早大戦を一月十五日西ノ宮球技場で挙行、全ナインの健闘惜しく早大に3—0で破れた。

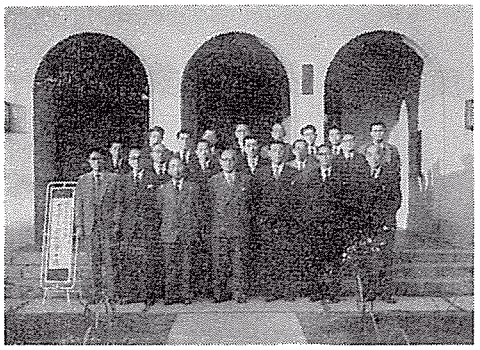
昭和三十二年一月三十日発行
關西大學學報　第二九九號
大阪市大淀区長柄中通二丁目一二番地
編集兼発行人　久井忠雄
印刷所　大阪市北区川崎町三八　株式会社ナニワ印刷所　電話(35)(七二七一)(七二八〇)番
発行所　大阪市大淀区長柄中通二丁目　關西大學學報局　電話堀川(35)二〇七二番　振替大阪二六七七二番

校友バッチ

校友

豊中支部総会

十一月二十四日(土)午後二時から千里山学舎大学ホールに於て開催。二十一名の出席者は開会に先立ち、第一学舎、図書館、第二グラウンドを見学してその設備の立派さ、規模の大きさに今更ながら関大の発展充実に意を強くした。岩崎学長の欧米訪問談の後、母校学生のブラスバンドで懐しい学生時代の歌の数々を聞き総会に入る。役員改選は、安富支部長、榎原副支部長の留任と決定して懇親会に入り和気靄々の内に関大の万才を三唱して宴を閉じた。



豊中支部総会

出席者
学校側　岩崎卯一学長
支部側　丹伊啓次、川島保春、横田敬治、竹村奈良長、中山慶造、加藤孝明、村田義夫、安富敬作、藤井豊光、小林良夫、榎原義一、榎原武雄、安久諍、先山保磨、佐々木豊明、木村彌策、木本昭二、水谷撲一、宮田武数、福本静馬、荻野環

千里山昭八会

十一月二十八日(水)午後六時より阿倍野「大市」に於て昭八会第四十五回例会を開催。幹事からの諸報告の後、母校創立七十周年記念に関連した記念樹寄贈の件を附議し、昭八会に因んで樹木八本を選定し寄贈することに決定した。なお昭八会二十五周年記念行事の件につき討論をなし小宴に入つた。

出席者
賀本敏英、浦野健二郎、中家利国、斎藤正興、結城丙太、岩田定二郎、中植巻一、宮地正一、大島武夫、木下忠夫、中江巽、北村文之助、美吉克之祐、平井三朗

斯文会総会

昭四専文卒の校友で組織する斯文会は十二月一日(土)午後六時から天五の「大阪屋」で総会を開催。二十七年振りで再会の人々もあり、お互いに壮健を祝して気焔を挙げた。

出席者
神屋敷民蔵、川内平三郎、川野政平、新谷武、野田平三、安井章吾、米満榮三、和田伝三

尚志会総会

昭和四年卒の会員により構成する尚志会では十二月八日(土)梅田「多幸梅」に於て第九回総会を開催。

出席者は十五名であつたが、協議事項として先づ次の第十回総会の開催時期を十一月とする事を決定。次いで關西大學七十周年を記念して植樹の寄附募集主旨に賛同し寄附をする旨申合せた。引続いて小宴に入り、自己紹介など行い和やかな空気のうちに午後九時散会した。

出席者
来賓　水谷撲一
支部側　田中重一　増田博　南浦宗央　溝口主雄　森田忠勇　松田利衛　中村光樹　奥田榮太郎　山口辰雄　加来秀介　北原元茂　山田清太郎　菅原三二　沢田捨二郎

尚志会総会

記念植樹申込者　(その三)

(昭和三十一年十二月二十七日現在)

大阪市役所支部	ヒマラヤ杉	一本
尼崎支部	銀杏	一本
西成支部	銀杏	一本
〃	山桜	六本
北浜関大クラブ	山桜	七本
神戸市役所関大会	山桜	五本
山陽電鉄関大会	山桜	四本
福島支部	山桜	四本
日立造船関大会	山桜	二本

昭和31年
校友名簿
昭和28年度版を増補・改訂しました
同窓との親睦連絡にぜひ御利用下さい
—収載人員二六、〇〇〇余名—
B5判　六〇〇頁
実費頒価五〇〇円
(送料当方負担)
申込先　關西大學校友課
大阪市大淀区長柄中通二丁目
振替　大阪一二八七五番

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和三十二年一月三十日発行（毎月一回三十日発行）

關西大學　昭和32年度　学生募集

大学院

修士課程　法学、文学、経済学各研究科
博士課程　法学、文学、経済学各研究科

学部（第一部＝昼・第二部＝夜）

法学部　法律学科、政治学科
経済学部　経済学科
文学部　英文、国文、哲学、仏文、独文、史学、新聞、東洋文学各学科
商学部　商学科

出願
1月16日より｛経・文　2月22日まで／法・商　2月23日まで｝

試験
経・文　2月24日　法・商　2月25日

○地方試験（法・経・文・商　第一部のみ）
試験地　高松・福岡・広島・金沢
出願　1月16日～2月18日
試験　2月24日

○第二部二次試験（法・経・文・商第二部のみ）
出願　3月7日～3月22日
試験　3月24日

○学部三年編入（経・文・商　第一、二部）
出願　3月7日～3月20日
試験　3月23日

◎入学要覧（要50円〒8円）　關西大學庶務課へ
大学院・学部第一部　大阪府吹田市千里山
学部第二部　大阪市大淀区長柄中通二

記念植樹募集

昨秋創立七十周年を記念して施設の拡充を図り、千里山及び天六両学園に近代建築の学舎を完成し得ましたことは洵に御同慶に堪えません。

さて、この構築美に配するに樹木や芝生の景観美を以てし、造園技術の粋をあつめて、教育環境を形成することは、日々これに接する学生達にあるいは憩いの、あるいは思索の場所を与え、学習研鑽の資となるべく、また、学窓を出でては学舎と共に、一本の樹木にも母校への思慕の情を抱かしめるでありませう。

かかる教育環境形成の重要性に鑑み、本学では植樹造園につとめたいと存じておりますが、また有志の方々からこの趣旨に御賛同下されて樹木の御寄附にあづかり得ば幸甚に存ずる次第であります。

昭和三十一年十一月

關西大學

何卒右趣旨に御賛同を賜わりまして、単価表により樹木御指定の上左記宛御申込下さいます様御願申上げます。

一、樹木単価表

イ、楠	（高さ十尺、巾七尺、太さ目通一尺）	壱本	一〇、〇〇〇円
ロ、銀杏	（高さ七尺、巾三尺、太さ目通四寸）	同	三、〇〇〇円
ハ、南豆ハゼ樹	（高さ八尺、巾五尺、太さ目通六寸）	同	六、〇〇〇円
ニ、山桜	（高さ七尺、巾三尺、太さ目通二寸）	同	五〇〇円
ホ、ユーカリ	（高さ八尺、巾三尺）	同	一、五〇〇円
ヘ、メタセコイア	（高さ四尺―五尺）	同	一、五〇〇円

単価表の値段は送料、植込材工並に根着き迄（枯れた場合は植替）の責任保証となっています

二、記念植樹御申込先

關西大學校友課
大阪市大淀区長柄中通二ノ一二
振替口座大阪一二八七五番